

森本千絵

とても楽しみにしていた伊丹十三記念館に... 伊丹さんにお会いした時間だったと思います。それを皆様と分かち合いたく思っています。e.n.報特別号とさせていただきます。

「ああ、いらっしよー」

# 伊丹十三の g.o.e.n. 特別号

きっかけは、2012年伊丹十三賞をいただいたことから始まりです。突然の素晴らしい賞をいただいたことから、急に伊丹さんに想いを馳せ始めました。映画はもちろんのこと、生き方そのものに興味が湧いてきたのです。記念館は、中村好文さんが伊丹さんに敬意と愛をもって建築されました。松山の大通りからはずれたところすべに、まるで神さまの大きなポストンバッグが置き去りになっているかのように、黒い木でできた建造物があらわれます。この木はひとつひとつ焼いて黒くなったものようです。その黒が深みのある墨です。ちょうど、私が伺った日は朝から雨が降っていました。墨となった木は縦に流れていて、その上を雨が走る姿は清く、そして色が醸し出されていました。そして、記念館の横に、同じく黒の三角屋根の車庫があり、英国車ベンツが展示されて



その車庫に「8」と書かれています。この「8」はなにを意味するのでしょうか？ そんなことを思いながら、記念館の扉へと向かいました。扉があいたとたんに、ふわっと外の世界とは別世界のやわらかな光がただよう、新しい外が目の前に広がっていました。中庭です。真四角の中庭があり、そこには一株なのに根元から二つにわかれた桂の木が寄り添いあうように天に向かっていました。雨が降っているはずなのに、そこには喜びの気が満ちています。その木はまさに伊丹さんと、館長であり奥様であり、女優である宮本信子さんが寄り添いあっているのです。



初めて見ました。その存在感は乗り物マニアだけでなく、重厚で思わず敬礼をしたくなるほどの美しさです。



そのまわりを部屋が囲んでいて、ひとつずつ木の周りを歩くように部屋を巡るのですが、最初にお目見えするのは伊丹十三さんの笑顔。「やあ、いらっしゃい！」。こちら「わあ！ やっとお会いできました。おじゃまします！」といった挨拶をして、伊丹さんの世界ははじまります。そしてすぐに宮本信子さんからのご挨拶の映像が流れ、本当に伊丹家に歓迎されるような空間です。



普段は入れないという2階のコーナーに導いてもらった。びっくりした。食堂そのものが、そのままに再現されていた。椅子も時計も本棚も。すべて非常に緊張した。本棚からは「お葬式」の打ち上げの様子の写真アルバムなど、さっきみてきた個人よりもっと個人。父であり、夫である伊丹十三の顔がそこにはあった。仕立てていた洋服がずらり並んでいるクロゼットやスーツケースに、靴に車の鍵もそこにあった。それをみていたら、館長である宮本信子さんの温度まで伝わってくる。こんなにかっこいい男はそうそういないと思う。いちばん大切な顔がここに隠されていた。これについてはあまりここでは語らないようにしたいと思う。とにかく、愛されている限り、彼は生き続けるんだと思った。



いきなり見せていただいたのは池内岳彦さんの絵や日記。池内岳彦くんとは伊丹十三さんのことです。漢数字の「一」とあります。そう、ここは、伊丹さんのあらゆる面や表情を「一」から「十三」にわけて繋がっていく空間なのです。

### 一 池内岳彦

小学校の頃に描いた野菜の絵や、夏季日記、昆虫観察ノートなど池内少年が描き見てきた風景が広がる。最初、こんな図鑑が売っているんだと思ってみたら、伊丹さんが描いたものと知りびっくりした。小学生とは思えないほどの見事な細密描写。



### 四 俳優

27歳の頃のプロマイドも飾ってあるのだが、かっこいい。舞台上に映画にと活躍されていたのだが、その目つき、存在感が異質で、想像力があるからこそ、役になりきるだけでなく、それ以上に物語をひっぱっていったのだと思う。



### 五 エッセイスト

「ヨーロッパ退屈日記」「女たちよ！」「問いつめられたパパとママの本」「再び女たちよ！」「小説よ奇なり」「日本世間断大系」「女たちよ！男たちよ！子供たちよ！」「自分たちよ！」などの書がぎっしり原稿と同時に飾られている。そして腹這いになって原稿を執筆する様子の写真を同時にみせて笑ってしまった。わたしにとって「女たちよ！」はバイブルであり、なぜか伊丹さんからたしなみや、料理などを習った気がする。実行はできてないが、こんな大人になりたいな、と書の中で約束した。それに猫のイラストなど伊丹さんの挿絵は面白い。

### 六 イラストレーター

これは展示方法がすばぬけて面白かった。手まわし式イラスト閲覧台が設置されていて、品のあるロングトイレットペーパーというか、洋風絵巻というか、天高の空間に、些細な絵が刻まれていて、それを手回してぐるぐるまわせる。大げさなものなだけど、絵は「スパゲティを巻くスペース」とか「ベーコンはごまかく切っていれよう」とかひょんなことが次々とあらわれる。また絵にすることもないことを丁寧に見事に描くもんだから、笑ってしまう。なんてチャーミングで、巧妙な人なんだろう。



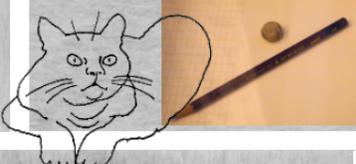
### 七 料理通

一面にタイルが敷き詰められていて、まるでキッチン。水の音が聴こえてきそうな壁から包丁やまな板、カレー鍋や厚焼き卵のメノまで。引き出しには食器類があり、骨董の皿も飾られていた。これらは、飾るといふより、そのままの状態のようだった。本からもうかがえるけど、さぞかしこだわりぬいた美味しい食事なんだろうな、と。一度食べてみたかった。黒豆煮とかスパゲティは特に食べてみたかったな。



### 八 乗り物マニア

これは入口のところでお目見えたベントーレにあたるので割愛する。



### 十 猫好き

伊丹家の家系あげての猫好き。コガネ丸からニャンキチ。映画「お葬式」でもニャンキチ役の役者猫が登場するくらい。膨大なスケッチや写真とともに、猫たちがどれだけ愛されてきたのかが伝わってくる。



### 十一 精神分析啓蒙家

わたしも伊丹十三賞をきっかけにすっかり夢中になってしまっている精神分析者・岸田秀さんとの対談など、とても興味深い記事が多く残っており、この場では長い時間読みふけてしまった。これに関しては、他12の顔の下に眠る真相が言葉として現れているので、実際に皆さんにも読んでほしいなと思った。



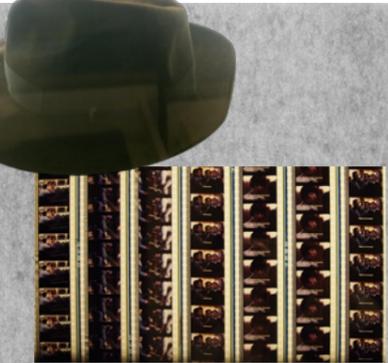
### 十二 CM作家

CMには自ら出演していたりと、気になるものが多い。コピーライターとしてもずばぬけていて、ひとことひとことがひっかかる。CMなどの商業デザインは消費されていく運命にあるもの。その中で人の心をざわつかせ、ずっと気になる存在にする天才だと思う。これは、映画の中でもいきている。逆にわたしなんかは、CMの参考にした場面も数々あるというところに繋がると思った。



### 十三 映画監督

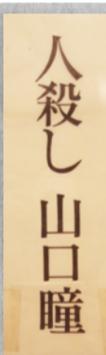
「お葬式」「タンポポ」「あげまん」「スーパーの女」の撮影風景から、すべてのチラシまで。この映画監督という顔をわたしたちはもっとも知っているはずなのに、なぜかこの記念館は、伊丹十三自身の根っこにあるものが広がっていて、ここに至るまでの12の顔を見てくると、もはやここでは驚くというより、当たり前に行き当たった、光が差し込む出口に感じてしまった。いつもかぶっていたポルサリーノの中折れ帽を目にしたとき、じんわりと涙がこみあげてきた。



# 十三さんだけに、「十三の顔」

### 三 商業デザイナー

これこそ、わたしと同じ職業の部分。伊丹さんの手がけた数々の装幀のタイプグラフィは秀逸で、何度もレタリングしている原画を見る事ができた。文字からも色気が漂う。



### 人殺し 山口瞳

そして、父、伊丹万作さんの世界へと続いていく。お手製の手描きのカルタが印象的だった。世の中にあるものではなく、そこには子への想いがたくさん詰まった世界でひとつしかないカルタ。



その一枚一枚をみていたら、無性にわたしも作りたい気持ちになってきた。こういうものを手にして育ち父の背中をみながら、13の顔をもつほどに、世界を広げていったのだなあと思った。ここは偉人の記念館とは違う。ひとりの男がどのように生まれてき

て、どのように生きてきたのか、そのすべてを一筋の血として分かち合うとても個人的な場所だ。でもわたしは、その個人的という部分が大事だと思っている。生まれたときから作る人間には性があると思う。そこに触れたとき、

言葉では上手く伝えられないが魂が震える。そして、モノも生きていて、すべてのモノに伊丹十三さんが生き続けている。そんなよそのらのモノとは違う。中庭の木のように生き続けている。



## 館長さんのごあいさつ



わたしはなんだか安堵してしまい、カフェで十三饅頭をいただきながら、嬉しくてたまらない気持ちになった。雨はまだ降り続けている。雨粒にあたり揺れる木をみていたら、伊丹さんがクスクス笑って、「こんなもんだい？ おれの生き方」って言っている気がした。

